

## 第十章 民間説話



十一番目の「力が半分、金が半分」の中で、おじいさんが住んでいたウブミヤーと言う場所がこの周辺

## 第十章 民間説話

民間説話は、昔話または民譚ミンタンといわれているのと同じ範囲のものである。民俗学では、実話または経験談の形で話され、昔話のように一定の形式を持たない世間話や土地を限定する伝説は昔話と区別されているが、ここでは、これらを含めて列記することにする。

与論島での昔話の古い形式の語りはじめは「ムツカーシ、ムツカーシ、ムヌガッタイヌ、アティテューサ」（むかしむかし、物語があったそうです）であったようで、明治十年代生まれの人はそのような語り口をする。

### 一 島のはじまりの話

むかしむかしの物語です。

フナキヲウの乗った小船が北の方から南に進んでいました。ところが小舟の舵が瀬にひっかかりました。フナキ

はこんな海の真ん中に瀬があったものだ、ちまらき（裾をまくり上げる）して瀬に降り立ちました。ところがぐんぐん潮が引き、瀬は大きくなりみるみるうちに島になりました。その瀬をハジピキパンタといいます。

フナキーは大変喜び家を建てて住みました。それで家を建てた土地をクニガキとよぶようになったということです。

フナキーは仲むつまじく暮らしておりますと、ある日フナキーの目前に二羽のホートウイ（首の長い鶴に似た白い海鳥）が飛んできて夫婦の契りを結びました。フナキーはホートウイを見まねて子孫をたくさん生み、その子孫は島いっぱい盛んになったということです。

（このはなしは西区・文字志氏から聞いた）

（注） フナキー 兄妹・姉弟または夫婦にも使う。

ハジピキパンタ 叶の高所の地名。

クニガキ 朝戸から西区に入った県道南側の地名。

文字志翁によると、まずクニガキに住み、後ブカナ（クニガキの北側の地名）に移り住んだと伝承されている。

## 二 キンヌの男とシヨウの天女

ウヤビンチャーカラキチャル、ムヌガツタイドウ。

むかしシヨウ（地名）というところに、美しい乙女がいました。いつどこからきたのか知っている人はいませんでした。月の夜になると、何か深い考えごとをしているのか、月を眺めては、ため息をついていました。

キンヌ（地名）というところに若者がいました。若者は、シヨウの乙女を妻にもらいたいと思い、毎晩乙女の家遊びに行きました。

若者はある晩、乙女に妻になってほしいと頼みました。ところが、乙女は、

「あなたの情け深いお心はよくわかっていますが、あなたの妻になれない深いわけがあるのです」

というのでした。そして、月を眺めて深いため息をつきました。若者は心配になって、わけを聞くのですが、乙女は、

「どうか、お尋ねにならないでください。言えない深いわけがあるので」

とやさしく答えるだけでした。何度尋ねても、頼んでも同じ答えでした。ある日の晩のことです。その晩も若者は乙女のところに行きました。ところが乙女は家の近くの泉（ニジャゴー）のそばのアダンにきれいな衣をかけ、水を浴びていました。若者は、そつと衣を盗んで帰り、倉の稲束の中に隠しておきました。

乙女は、「衣をかえしてください」といつて頼みましたが若者はかえしませんでした。それで乙女はキンヌの若者の妻になりました。

それから女の子が生まれ、それからしばらく年がたつて弟が生まれました。夫は海や畑と毎日楽しく働いていました。

ところが妻は、しょんぼりする日が多くなり、月の夜になると、深いため息をつくのでした。

ある日のこと。姉は弟をおんぶしてあやししながら、子守歌を、

私<sup>私</sup> 運<sup>運</sup> ガ<sup>ガ</sup> アー<sup>父</sup> チャ<sup>チャ</sup> ヤ<sup>ハ</sup> ウン<sup>海</sup> パ<sup>畑</sup> ル<sup>（原）</sup> イ<sup>行</sup> ジ<sup>ッテ</sup>  
魚<sup>魚</sup> ト<sup>ト</sup> テイ<sup>テ</sup> ウ<sup>オ</sup> ワー<sup>イ</sup> チャ<sup>ニ</sup> ヤ<sup>ナ</sup> イ<sup>ツ</sup> パ<sup>タ</sup> ル<sup>リ</sup> ツ<sup>作</sup> ク<sup>ツ</sup> タ<sup>タ</sup> イ<sup>リ</sup>  
ワ<sup>ワ</sup> タ<sup>タ</sup> シ<sup>シ</sup> タ<sup>タ</sup> チ<sup>チ</sup> ガ<sup>ガ</sup> ア<sup>オ</sup> ン<sup>母</sup> マ<sup>マ</sup>ー テ<sup>オ</sup> イ<sup>テ</sup> ン<sup>ン</sup> ト<sup>ト</sup> ウ<sup>ウ</sup> カ<sup>カ</sup> ラ<sup>ラ</sup> ウ<sup>ク</sup> リ<sup>ダ</sup> ッ

テイ<sup>テ</sup> ウ<sup>オ</sup> ワー<sup>イ</sup> チ<sup>ニ</sup> ヤ<sup>ナ</sup> ル<sup>タ</sup> チ<sup>美</sup> ユ<sup>しい</sup> ラ<sup>ラ</sup> ア<sup>オ</sup> ン<sup>母</sup> マ<sup>マ</sup>ー  
着<sup>着</sup> ル<sup>ル</sup>（カケル） 衣<sup>衣</sup>（コロモ） キ<sup>キ</sup> ヌ<sup>ヌ</sup> ヤ<sup>ハ</sup> パ<sup>チ</sup> ビ<sup>ヨウ</sup> ル<sup>チヨ</sup> ヌ<sup>ノ</sup> 衣<sup>コロモ</sup>  
ク<sup>ク</sup> ラ<sup>倉</sup> ヌ<sup>ノ</sup> ウ<sup>ウ</sup> イ<sup>上</sup> ナ<sup>ニ</sup> ン<sup>ン</sup> マ<sup>稲</sup> イ<sup>タ</sup> バ<sup>バ</sup> ヌ<sup>ガ</sup>  
ウ<sup>ソ</sup> リ<sup>レ</sup> ガ<sup>ノ</sup> ナ<sup>中</sup>ー ナ<sup>ニ</sup> ン<sup>ン</sup> ハ<sup>カ</sup> ク<sup>ク</sup> チ<sup>シ</sup> ヤ<sup>テ</sup> ン<sup>アル</sup> ド<sup>ヨ</sup> ウ<sup>ウ</sup>  
とうたいました。

母は、娘の子守歌を聞いて、倉の稲束の中から「天女の羽衣」を見つけ出しました。ある月夜のこと、妻は、「私は月の世界からくだったてきた天女です。もう月に帰らねばなりません。どうかお許してください」といつて夫に頼みました。

月の夜でした。  
天女は、いとまごいをして、羽衣をまとい、天に昇ってしまつたということです。

（このはなしは西区・栄マツさんから聞いた）  
（注）文字志翁の伝承では、若者はシヨウウの住人で、乙女はどこから来たのかニジャゴーで水を浴びていたという。

### 三 蛇身の美しい男と乙女の恋

ムツカーシ、ムツカーシ物語又アティテユーサ。

むかしむかし、どこか分からないが（あるところに）美しいメーラビと母がいたそうです。母は、わが身の年寄るのも知らずに、娘の成長を楽しみにしていましたので、娘心のつく十四歳になったということさえ、忘れていたのでした。娘は、十六歳の年を迎えるころになると、つぼみがほころびはじめるように美しくなりました。村の若者達は、胸のうちを歌にしようと思いました。

高さ咲く花や 登て 取い難しや

根枝 握みとて 思たばかり

高い梢コシエに咲いている花は登ってとることは難しい、下枝を握って（梢を仰いで）思ったばかりです、という意味です。メーラビは若者達に何と答えてよいか、分かりませんでした。

ある夜、それは人の心にしみ入るような三味線の音がメーラビの家に近づいてきました（この島では、昔から若者達が思い慕うメーラビの家に、夜な夜な通って遊ぶ

風習があつた）。母と娘は、若者を縁側に座らせて、若者の三味線に聞きほれながら歌い遊びました。メーラビが、

わぬや深山に 咲ちやる花へしが

いちやし うみさとや 尋て うわちゃんが

と歌えば、若者は、

深山に咲ちむ 浅山に咲ちむ

色どかなしやある 匂ぢ きちゃんど

と歌って、メーラビに答えました。こんな夜が幾日も過ぎました。男は世にも珍しい美男のうえ弾く三味線の音とよい歌声といい、すっかりメーラビは心をとらえられ、清らかな思いを若者に寄せるようになりました。

この若者には三つの不思議なことがありました。その一つは、若者がきて三味線を弾きはじめると、糸をつむいでいた母が、いつもきまつて居眠りをするのでした。その二つは、若者はいつも後ろを見せることなく、縁側に背を向けて座り、帰るときも後ずさりして背中を見せませんでした。その三つは、どこからきたのか、また名前を明かしませんでした。

娘は、この若者が好きになるばかりでしたので、ある日母に思いを打ち明けました。

母は、眠りをさそう三味線の音といい、歌といい、またあの麗しい顔だち、これは天の使いか、それとも地から湧いた動物の精なのか、と思っていました。

母は娘に「ここにつないでいる芭蕉の糸を針に通し、明日若者の袖口に縫いつけておくように」と言いつけました。その夜、娘は母の言いつけどおり、そつと若者の袖口に縫いつけました。

あくる日、娘と母は、芭蕉糸をたどり、たぐつて若者の住む家を探して行きました。ところが糸は大きな木の根や岩の間をぬけて、老木の根の巻きついた岩穴の中に続いています。そこには糸をつけた大きなマツタブ（赤色のまだらのあるヘビ）が、疲れた様子で寝ころがっていたそうです。

（この話は西区・栄マツさんから聞いた）

それで夜遊びをする年頃になったメーラビは、遊びに来た若者の名前を、親に知らせるものだといわれる。また、親は娘が夜遊びに出たら帰るまで起きているものだ

といわれる。

#### 四 次郎の家の老猫

むかしの話です。

むかし、ウーニヌムイ（大峯山）の麓にナータイ次郎という男がいました。次郎の家にとても大きな老猫がいました。この老猫は何歳になるか誰も知りませんでした。が、家族と同じようにかわいがられていましたので、むくむく肥えていました。

ところが不思議なことが起こりました。いままで庭先や縁側にごろごろして、家からめつたに外に出ることがなかつたのに、近ごろ毎晩外に出るようになりました。家の者が目を離しているすきに出て、すきをみてそつと帰ってきました。誰かにみつかり、気まずそうに目をそらすのでした。雨の夜も風の夜もどこへやら行って、びしょ濡れになって帰ってくることもありました。それで家族の者は、近ごろ老猫の様子がおかしいと思っています。

次郎は、たいそう魚釣りが好きで、天気の良い日は毎

晩ひとりで海に出かけました。ある晩のことです。次郎がいつものように釣りに行く用意をしていると、老猫はニャンニャンいいながら近寄ってきて次郎に体をこすりつけました。それからしばらく次郎の顔色や姿を見まわしていましたが、釣りの道具やウンデイルをかぎまわつてから、屋敷を出て行きました。

次郎は今晚こそ老猫の行き先をつきとめてやろうと思いい、忍び足で後をつけました。ところが、老猫は墓場に行くピチュウイ道（葬式のととき墓に行く道）を歩いて、墓に行きました。

次郎は、物陰でじっと老猫を見つめていました。それとは知らず、墓の前に座ると前足で顔をふき舌でなめまわしてから、何やら話している様子でした。次郎は耳をそばだてて老猫が話しているのを聞きました。

わたしの家は、みんな楽しく暮らしています。前はみんなわたしを大変かわいがりよつたが、近ごろわたしが出外するようになってから、冷たい目で見られるようになりました。

いちばんよくかわいがり、頭をなでてくれるのは

パーパー（おばあさん）です。次郎さんや次郎さんのトウジ（妻）も親切にしてくれます。次郎さんは、魚釣りが好きで、ほとんど毎晩のように海に行きます。今晚もたくさん魚をとって帰るはずですよ。早く朝になればいいのになあ。魚の頭がもらえますから。

だが、じいさんはあまり好きでない。今日もわたしがいじさんの枕もとでのどをごろごろ鳴らして休んでいたら、「やかましい、この老いぼれ猫」といって、骨だけになった手で私を壁に投げつけました。近ごろ時々そんなことがあります。あの意地の悪いじいさんは、早くグシヨ（あの世）に引きとってくださいませんか。

こんな話をしていました。次郎はぶるぶるふるえました。家族の者は次郎の話を開き、みんな眉をひそめました。じいさんは「恩知らずの老いぼれ猫め、家におくことはできない」といって怒りました。

捕えてこらしめるか、遠くに追放するか、ということになり、早速猫の好きな御馳走をつくり、わなをしかけて猫の帰りを待ちました。間もなくして老猫はそしらぬ

顔をして帰ってきました。ところが、日ごろ食べたいと思っていた御馳走が皿いっぱい盛られていました。何だか家の中が冷たいような気がしたが、腹をへらしていたので、飛びつくように食べはじめました。

三口か四口め、しかけてあつたわなが首にかかったようでした。だが前足でわなの端を踏んでいたようで、首をくくらずにすみしました。あわてて後ろに飛びさがると親切だった次郎がただならぬ顔をして打ちかかろうとしたので、老猫は素早くその場を逃れ、大事に至らずにすみしました。次郎は「捕り逃してしまった」といって残念がりました。じいさんは「墓に行つて告げ口をされるぞ」といい、「これは大変、どんなことが起こるかもしれない」といって不安がつている家族の話が、垣根の外にのがれた老猫に聞こえていました。

その日から、老猫はとうとう次郎の家に帰ってきました。その後老猫を見なかったといひます。

こんなことがあつてから何日かして、じいさんは亡くなりました。それで年をとつた猫は、あの世とこの世を行き来するといわれています。

(このはなしは西区・源島保氏から聞いた)

## 五 物語好きのばあさん

むかしむかしのはなし。

あるところに、物語を聞くことが好きなおばあさんがいました。おばあさんの家には村中で評判の美しいメーラビがいました。

おばあさんの物語好きも村中の評判でしたが、まだ一度もキキバツテイタ(聞き飽きた)ということがありませんでした。物語が一つすむと、もう一つとねだりましたので、みんなこりていました。

ある晩のことです。村の若者達がおばあさんの家に来て来ました。おばあさんは若者達に「お前達の中で、わたしが飽きたというまで、物語をして聞かせる者はいないか」といひました。若者達は「そのほうびに何をくださるか」と尋ねました。するとおばあさんは「わたしの娘をくれよう」と約束しました。若者達はそれが目的だったので。

このことが村中に知れ渡ると、若者達は毎晩入れかわ

り立ちかわり、海や山や旅の話をするのでした。でも、おばあさんは「それは珍しい、それからどうなった…」というばかりで、おばあさんが飽きるまで物語のできる者は一人もいませんでした。

ある晩のこと、ひとりの若者が「おばあさん、面白い物語をしましょう。もし、おばあさんが聞き飽きたら娘さんをもらってもよいですね」と念をおしました。おばあさんは「よいとも、よいとも、早く聞かせてくれ」といいました。

若者は、たくさん面白い物語をしておばあさんを喜ばせました。それから若者は長い長い物語の前語りをはじめました。

むっかーし、むっかーし。

あるところに、おじいさんとおばあさんがいました。おじいさんとおばあさんは、ウン（甘藷）をつくって、

根も葉もニィ 根 コレ 食べ ・ パア 葉 コレ

食べ と食べたそうです。それから、また、ウンを植えて根も葉も食べたそうです。それから、またウンを植えて根も葉も…それから、またウンを植えて…。

何度も繰り返しました。おばあさんは、とうとうがまんしきれなくなつて、

「その話は、もう聞き飽きた。その先を話さんか」と催促しました。若者は、

「おばあさん、その先が大変面白いんですが、あとしばらくがまんして聞いてください」といつて、

「ウンを植えてから…それからまたウンを植えてから根も葉も…」と話し続けました。おばあさんは、いよいよたまらなくなつて、

「珍しい物語はまだ出ないのか、珍しい物語は」と責めました。若者は、

「おばあさん、珍しい物語の前話をしているのです。珍しい話の前話は昔から長いといいます」といつて若者は、またはじめました。

「ウンを植えてから…それから、また…」

おばあさんは、とうとうコックリ居眠りをはじめてしまいました。若者は、それでもひと晩中、

「ウンを植えてから…それから、また…」

と面白い話の前話を続けました。おばあさんが目をさま



したときは東の空が明るくなっていました。若者は、  
「ウンを植えてから…それから、また…」

と語り続けていました。おばあさんはすっかりあきれか  
えり、約束通り娘をこの若者にくれたということだ  
す。

(このはなしは朝戸・南白澄氏から聞いた)

## 六 赤い着物を着た火魂

むかし、ある家に用心深い嫁がいました。外に出ると  
きはいつもハマ(かまど)の灰をとり、土間をきれいに  
片付けておきました。それからハマの前には、桶に水を  
入れておきました。

ある日、嫁は畑から帰って土間に入ると、ハマの上の  
棚に、赤ウツクイ(頭布)をかぶり、赤い着物を着た女  
がいました。嫁はびっくりして、

「あなたは何者か、用は何か」

と開きました。すると赤い女は、

「わたしは火魂だ。この家に来て三年三月ミツキになる。こ  
の家をとらないと(火事にしないと)戻れない。あなた

が火の用心をするので家をとることができないんだ」と  
言うのでした。嫁が、

「三年三月の間何を食べていたか」と聞くと、

「朝も昼も夜も、あなたの煮たきするご飯や汁の湯気  
を食べていた」と言いました。火魂は嫁に、

「わたしはもう戻らねばならない。それで家の四隅に  
さしてあるススキを抜いてきて、ホーハイ、ホーハイと  
叫びながらハマの前で燃やしてくれないか」と頼みまし  
た。嫁は火魂の言う通り、屋根の四隅にさしたすすきを  
抜いて燃やすと、火が棚まで燃え上がりました。嫁はびっ  
くりして、側に置いてある水桶の水を棚にぶっかけまし  
た。火魂は水をかけられ灰の固まりになって土間に落ち  
ました。嫁はあわてたので、ホーハイと叫ぶのを忘れて  
いました。それで火魂に家をとられずすんだということ  
です。

(注) 与論島では、家事になると男がホーハイ、ホーハイと叫ぶ。

これは魔除けのためだといわれる。女はホーハイを口にし  
てはならない。

また旧暦七月十六日に、家の四隅にススキをさすのも魔除

けで、どこでもシバサシとよばれている。

女が一生のうち三回火事を起こすと、その女は火魂になるといわれ、火の不用心を固くいましめている。

(このはなしは叶・池田並澄氏から聞いた)

## 七 ビトゥ(イルカ)になった甥

叔父と甥は、天気の良い日はいつも二人で小舟を漕ぎ、魚を捕りに行きました。魚の捕れる日もあれば捕れない日もありました。叔父は、魚の捕れない日は、

「今日は魚のつかない日のようだ。海の神様がおっしゃるように、さあ、今日はこれで帰ることにしよう」

といいます。甥はそんなとき、

「海の神様の日なんてそんなことがあるものか、釣り場をかえよう」と言い張り、叔父にさからうのでした。

こんな押し問答をしながら穏やかな日はいつも二人で魚捕りに行くのでした。

ある日、叔父と甥はいつもの釣り場に小舟を漕ぎました。その日は、魚のつく日でたくさん釣れました。ところが東の方に黒い雲が立つのを見ると、たちまち西の空

まで広がり、海をおおいつくしてしまいました。それに風も吹き出し、波がさわいで舟ばたをたたきました。叔父は、

「海が荒れたぞ、ヤフ(かい)を握れ、帰るんだ、漕ぐんだ」と言いつけるのですが、甥は叔父の言うことを聞こうとしません。叔父は「海の神様が怒っておられる、板一枚下は地獄だぞ」とどなりました。甥はそれでも聞こうとしません。

海はだんだん荒れ狂い、小山のような波が小舟に襲いかかりました。叔父はとっさに、

「舟ばたを握れ」

と叫びましたが間に合いませんでした。甥は不用意であつたため握っていたヤフで片目を突き、海に振り落とされてしまいました。その時波間から、

「叔父さん」

という一声を聞いただけでした。

叔父は甥の名を呼びながら、波風に身をまかせていました。ところが、しばらくすると海の上はうそのように穏やかになりました。それからどんなに呼び叫んでも甥

の声も姿もありませんでした。

叔父は、それから後、なぎの日は一人で小舟を漕ぎ、いつもの釣り場に行きました。そしていつものように甥の名をよび、一声聞かしてくれと目をつぶるのですが、答えてくれませんでした。魚は釣れる日もあるが、釣れないときは、海の神様の日であろう、と漕ぎ帰りました。

ある日のことです。

その日は、大変魚のつく日でした。夢中になって釣りました。ところが、東の空に雲が立ったと思うと、みるうちに西の空にひろがり、海の上を真っ黒い雲がおおいつくしました。風が吹きはじめました。波が舟ばたにざわめきました。たちまち荒れ狂い叔父の小舟は波にのみ込まれそうになりました。ところが荒波の谷間から、

「叔父さん」

とよぶ声があったかと思うと、小舟の舟ばたをたたく者がありました。叔父は狂った人のように甥の名をよびました。そして、「もう一声聞かしてくれ」と叫びました。

そのとき、

「叔父さん」

という声が出て、舟ばたをたたきました。それっきりでした。どうしたとか、叔父の小舟のまわりは、油を流したように波が穏やかになり、風もやみました。ところが叔父の小舟によりそって一頭のピトウが泳いでいました。片目を傷めていました。

叔父は、甥の名を呼びましたが、再び甥の声を聞くことはできませんでした。

島を遠く離れて釣りに行くと、たまに鯨・イルカなどが小舟に近寄って小舟を転覆させることがあるそうです。そんな時は、舟ばたをたたいて「これは私の叔父の舟」と唱えると、人間にじゃまをしなくなるそうです。また海上で何ものかにまどわされようとする時も「ふりや、わあ、ふじゃ舟」といって舟ばたをたたくものだそうです。

(このはなしは叶・池田並澄氏から聞いた)

## 八 鯨になったママ子

ママ母に育てられている子がいました。ママ母はこの子を大層いじめました。ママ子の伯父は、かわいそうに

思い、その子を引きとってかわいがりましたので、しあわせに成長しました。伯父と甥は、海に行ったり、畑に行ったり、楽しく暮らしていました。

ところが、ある日甥は、

「伯父さん、私はいつまでも伯父さんのそばにいたいのですが、そうしておれないと思います。どうしたらよいでしょうか」

と相談しました。伯父は、

「私も別れたくないのだが、お前は海の王者になる方がしあわせでしょう」といいました。甥は、

「それでは伯父さんのおっしゃるとおり、海の王者になります」といいました。甥が、

「伯父さん、海の王者というのは、どんな魚ですか」と尋ねると、伯父は、

「体がいちばん大きく、みんながたいへん恐れるもので、海の支配者であるグージャー（鯨）になれ」といいました。

こうして、甥は海の王者になることになりました。

いよいよ伯父と甥が、別れなければならない日が来ま

した。甥は伯父に、

「伯父さんが海上で私を見つけたら、舟ばたをたたいて、フジヤ舟（伯父の舟）、フジヤ舟といって知らせてください。そうしたら伯父さんの舟には、どうもしませんから」、そう言って、甥は海に入って鯨になりました。甥は鯨になって潮を吹きあげ沖へ泳いで行きました。

伯父は天気の良い日は小舟を漕ぎ、沖へ釣りに行きました。ある日のことです。小山のように大きな鯨の群れに出あいました。小舟は今にもくつがえされそうになりました。伯父は、

「フジヤ舟、フジヤ舟」

と言いながら、舟ばたをたたきました。すると鯨はおとなしくなり、伯父の舟をさけて泳ぎ去りました。

それで、この島の人人々は、小舟に乗って海に出たとき、鯨やその他、海の上で災いに出あったときには、舟ばたをたたいて「フジヤ舟」というようになったということです。

（このはなしは那間・竹下茂徳氏から聞いた）

## 九 若者の自慢くらべ

島の若者達は、海が荒れて魚捕りに行けなかったり、雨が降ってパル仕事のできない日は、集まって力比べをしたり、知恵比べをしたり、自慢話をしたりしました。

あるとき、話は食い比べになりました。若者達は、思い思いに自慢をしました。そこで「自分は二升のもち米ご飯を一度に食べることができ」という若者がいました。若者達は、それでは明晩もち米ご飯を二升炊いて食べさせてみようということになり、もち米を少しずつもらい集めてまわりました。

自慢をした若者は、これは困ったことになったと後悔しましたが、いまさらどうすることもできません。どうすればよいか、アチャ（父）に聞いてみました。父は、「朝から何も食べずに空腹にしておけ」

といいました。それでも安心できず若者は、隣の物知りといわれるウプ（おじいさん）の知恵を借りることにしました。ウプは、

「ひとかま食べたらず用に行くといつて、ぬけ出して吐

き出しなさい」

と教えました。若者は、それでも安心できず、「ウプ、どうかもつとよい知恵を授けてください」と頼みました。ウプは、それではといつて、

「太い縄帯をしめて行きなさい。そしてどうしても腹に入らなくなったら帯をといて天井に結びつけてぶら下がり、腹のへるまでくるくるまわりなさい」と、あるだけの知恵を授けました。

あくる晩、若者は太い縄を腹にくるくるまいて出かけました。若者達はもち米飯のカマを二つ真ん中におき、輪をつくって座って待っていました。

若者はひとカマやつとのことで食べ終わりました。そして、ウプから授かったように帯をとぎ、ようやく立ち上がって縄を天井の横ぬきに投げて結びました。それから腹がへるまでぶら下がり、くるくるまわりました。そのうち腹が少しへり、もうひとカマやつと食べたということでした。

（このはなしは西区・栄喜次郎氏から聞いた）

## 十 袋に魂を入れた物語

ムツカーシ ムツカーシ ム又ガツタイ 又 アテイ  
テューサ ワラビンチャー。

イナゲーラサン又シガ メーラビヌフィル ヤーヌア  
テイテューサ。ウヌメーラビヤ ウーヤンメーシチ ヨ  
ウー パラヂビンチャー ナガ、ヤーヌパタヌピチュン  
チャー ナガ ムールアチマテイ ウイトギ シラリト  
テイ テューサ。

マーユナーナテイカラ ウヌメーラビムウーテイ ア  
シビンニヤハエータルワカムヌガヨー メーラビヌヤー  
カテイ ウイトウギシンニヤ イジテューサ。

ガツシヤクターヨー ム又ヌヨー ヤーヌマワイモ  
テイ フビヌミイカラ ヤーヌナー 又ドウミシチ(の  
ぞいて)アイキュツチューサチヨー。

ワカムヌナー ウヌ ム又カテイ、  
「ウロー ヌーシ アイキュンチガ」

チチ キチテューサ。ガツシヤクター ムヌヤ ヨウー、  
「ワナー イチバンドウイ(一番鶏) 又 ウテエント

ナフマヌ フナグヌ イヌチトウリバドウナユール」  
チュツチューサ。ガンチチイティーカラ ワカムヌカ  
テイ、

「ウラン イヌチトウテイダシキリ」チュツチューサ。  
ガツシヤクターワカムナー、

「ガシユンボー ワヌントウイダシキシラン」、チチ  
テューサ。ウリカラ ムナー ワカムヌカテイ、

「ウロー パアー(外)ナンテイ ピチュヌキューシ  
ミチハタリヨー」チチツティーカラ ムナー フビヌ

ミーカラ ヤーヌナーカテイ ペンチパユツチューサ。

ム又ヌ ヤーヌナーカテイペンチヤクター ウイトウ  
ギシエルピチュンチャーヤ ムールニブイプジ(居眠り)  
パユツチューサ。

ムナー メーラビヌ マクラガイ(枕もと)ナン ビツ  
チツティーカラ プチクル(懐)カラ プクル(袋)イ  
ジャチ クチアイテツティー オーギシ プクルヌナー  
カテイ メーラビヌタマシーインチャー(を) オージ

イリユツチューサ。プクルカテイ タマシー オージ  
イリタクター メーラビヤー アクビシチツティカラシ

ジパユツチユーサ。ガシツテイーカラ ムナー フビヌ  
ミーカラ ページテイキユツチユーサ。

ウリカラ、ワカムナー ムヌイユンガネーシ パカ  
(墓) タンコウアイチテユーサ。アイキユンガンチャナ  
ワカムヌナー ムヌカテイ、

「アマクタンカ ワヌン プクルトウオーギ フワー  
チミイ」チチテユーサ。ガツシャクター ムナー、

「アマクタンカ デンドウヤ」

チチ、ワカムヌン ムタシユツ(持たす)チユーサ。ワ  
カムナー プクルトウ オーギ(扇)トウテイカラ、パ  
タパタ ワキタタチ(脇をたたく)クツククウーウーチ  
チ、トウイ(鳥)ヌ ナキユール<sup>ネ</sup>メービ シナテユーサ。  
ガシツテイ ワカムナー ムヌカテイ イチバンドウイ  
ヌナキユイ チチテユーサ。ガツシャクター ムナー  
アワテイテイ ピンギユツチユーサ。

ウリカラ ワカムナー メーラビヌヤカティムドテイ  
イジ メーラビヌ マツクラガイナンビツチツテイーカ  
ラ プクルヌクチ(袋の口)アイテイ ピジャイヌミン  
(左の耳)カラ、ミギー(右)ヌミンカラ クチカラ

パナカラ オーギシオージ タマシイ イリテイテユ  
サ。フリヤー シトウヤヌ パーパーカラキチャル ム  
ヌガツタイドー ワラビンチャー。

(このはなしは、栄マツさん 明治十三年生まれ  
の話を探録したものである)

## 十一 力が半分、金が半分

ウグミは赤子を抱いてウワー、ウワーと泣かせながら  
歩くそうです。人間に行き会うと、悲しそうな顔をして、

「しばらく、この子を抱いていてください」

と頼むそうです。断れないほど悲しい顔をしているそう  
です。それから、

「草履を貸してください」

というそうです。頼まれるまま、子供を抱いてやり、草  
履を貸してやると、草履の八ナ緒の切れるまでは、待つ  
ても待つても帰ってこないそうです。

それで草履を貸すときは八ナ緒を切ってから貸すもの  
だそうです。それから赤子の尻をつまんで、ウワー、ウ  
ワー泣かせると、あわてて帰ってくるそうです。それが

らウグミは、

「あなたは力が欲しいか、イエーキ（金持ち）になりた  
いか」

と聞くそうです。金持ちになりたいといえば、富だけを  
授けるので、病弱になりやすいそうです。力が欲しいと  
いえば、バカ力だけを与えるので貧乏になるそうです。  
それで、イエーキが半分、力が半分というものだといわ  
れます。

むかし、ウプミヤー（地名）というところに、心のき  
れいなおじいさんがいました。砂糖を製造する季節で、  
朝からサタムエーの人たちとキビを運んでキビをしぼり  
砂糖をたきました。夕方砂糖をたきあげムエーの人たち  
が帰った後、明日のだんどりをして家に帰ったのは夜中  
を過ぎていました。

ミチエー（地名）の坂道にさしかかると、ウワー、ウ  
ワー赤子を泣かせながら、女が坂道をくだってきました。  
赤子をふところに抱き、女は悲しそうな顔をしていまし  
た。女は、おじいさんに、

「おじいさん、すみませんがしばらく赤子を抱いてい

てください」

と頼みました。あまりに悲しそうな顔をしているので、  
心のよいおじいさんは抱いてやりました。また女は、  
「おじいさんのはいている草履を貸してください」  
といました。おじいさんは、気の毒に思い貸してやり  
ました。女は、人の家のある方向に向かって歩いて行き  
ました。

おじいさんは、赤子がお腹をすかしているので、向こ  
うの家に乳をもらいに行くものと思いきんでいたので  
きす。ところが女は、待っても待っても帰ってきません。  
とうとう赤子がお腹をすかしてウワー、ウワー泣き出し  
ました。女はあわてて帰って来ました。そして女は、

「おじいさん、力が欲しいか、イエーキが欲しいか」  
と聞きました。おじいさんは、砂糖だるを持ち上げる力  
も欲しいし、イエーキにもなりたいたのでした。その二つ  
とも欲しいのでした。それで、おじいさんは、

「力が半分ばかり、イエーキを半分ばかり」

と答えました。それから後、ウプミヤーのおじいさんの  
子孫には力持ちが生まれました。そして倉を三つも建て



るイエーキになったということです。

(このはなしは西区・栄マツさんから聞いた)

## 十二 ころころキシゾウ

あるところに、キシゾウという力持ちの大男がいました。体が大きいただけ大食漢で、たくさん食べるだけに仕事は人の数倍しました。それで村人から仕事を頼まれ、ひっぱりだこでした。

仕事をする道具は、鍬でも鎌でも普通のものでは間に合わないので、特別あつらえのものでした。米つきを頼まれて村の家々をまわりました。たいへん大きな臼とキネをかついでまわりました。困ったことに、キシゾウに米をつかせると、力があり余って米をインジュミ(細粉)にしてしまうのでした。

キシゾウは、仕事がないときはころころ寝ころんでいました。それで村人から「ころころキシゾウ」というあだ名をつけられていました。

ある月の十五日、キシゾウも村人と一緒に潮干狩りに出かけました。潮が引いたので、キシゾウはサンゴ礁の

上にごとりと横になりました。そうしているうちいびきをかいてすっかり寝こんでしまい、気のついた時は潮が満ちはじめて体を濡らしていました。それだけではない、カニや人食い魚につつかれて血がにじみ出ているほどでした。

キシゾウは、島の南側のパンタ(高地)から、ひとまたぎの距離に見えているヤンバルを眺めて、日を暮らすことがありました。話に聞くヤンバルの島は広いということでした。キシゾウは、ひとり言をいいました。

「ヤンバルは広い島だと聞くが、自分よりも力持ちがいるだろうか」

「ヤンバルに渡ってみよう」

キシゾウはヤンバルに渡りました。ヤンバルの村には、力持ちの大男がきたといううわさが広がりました。村の男達はキシゾウと力比べをしようと相撲を申し入れました。村の広場に土俵が用意されました。村々から見物人が集まりました。

キシゾウは、ヤマグンダイ(カンザンチク)を数本つかんで土俵にあがりました。相手の男達や、見物人は何

事が起こるだろうかと、かたずをのんで見つめていました。するとキシゾウは、手につかんでいる竹をびしびし握りつぶし、もみほぐし、藁で縄でもなっているようにもみ合わせて腰に巻きつけました。

見物の村人達は、キシゾウの怪力を見て驚き、

「うまくいつてかたわ、へたをすると命があぶないぞ」と、ささやく声が聞こえました。

相撲を申し入れた男達の中には、恐れをなしてしりごみする者もいましたが、いまさら取りやめることもできず、三、四人で組をつくりキシゾウにぶつつかりました。キシゾウは、あっけなく土俵の外に押し出され、軍配はヤンバルの男達に上がりました。

その夜、男達は酒・肴サカナを持ってキシゾウの宿に訪ねてきて、礼をいいました。キシゾウは、

「負けるが勝ち」

といって笑っていたそうです。

(このはなしは西区・有馬義一氏から聞いた)

### 十三 ミシヌ シングルミヤ

(北の家のよごれた男)

むかし、ある村に、村一番の金持ちがいました。その家に村一番のチュラメラビをお嫁さんにもらいました。お嫁さんは、しんぼう強く、よく働く女でした。

お嫁さんは、お米のご飯ばかりではもったいないと思いい、ある晩、麦をまぜた飯をたきました。すると主人はたいそう怒って、

「こんな飯が食えるか、これはニダン(使用人)の食べるもんじゃ」

と箸を投げつけ、お嫁さんをひどくしかりつけました。

お嫁さんは泣きながら、

「今度だけはお許してください」

と心からお詫びしました。それでも主人は、

「そんなやつはこの家におくことはできない、今すぐ出て行け」

といって許してくれませんでした。嫁は仕方なく、自分の着物をソイに入れて頭にのせ、庭に出ました。行く先

のあてもないので、家の前の倉の下でしくしく泣いていました。

すると、不思議なことに倉からもみ俵がころがり落ちてきました。そして離縁された女にいました。

「デーヨー デーヨー ミシヌ シングルミヤー ヌ  
ヤー カティ デーヨー デーヨー」

そういいながら、つぎつぎ落ちては北の方向にころがって行くのです。女は俵の言うままに、北の方向に歩いて行きました。

ところが、そこには貧しい小さい家があつて、薄暗い家の中に、どす黒くよごれた男がいました。男は、よごれた芭蕉布のふんどしをしめ、カマドを向いて鍋を炊いているところでした。

女は、俵が話したミシヌシングルミヤーはこの家で、この男に違いないと思いました。「ごめんください」と声をかけても、振り向こうともしませんでした。

女は訪ねてきたわけを話し、この家の嫁にしてくださいよう頼みました。男は「そんな美しい方を嫁にもらえる男ではない」といって、承知してくれませんでした。

それでも女は、

「どうか、お願いいたします。あなたは千俵の俵を積んでください。私は千反の布を織りあげましょう。あなたの千俵と私の千反とどちらが早いか、働きましょう」といって頼みました。

二人は夫婦になり、男はめでたく千俵の俵を積みあげました。女は、千反の布を織りあげました。こうして大変大金持ちになりました。

ある日、この家に気の毒な男の物もらいが来ました。そのものもらいは、前の大金持ちの男でした。女は前の夫の変わり果てた姿を見て驚きました。女はかわいそうに思い、米のおかゆをたいて、心からもてなしてあげました。

ものもらいの男は、追い出した女が、こんな大金持ちになつているのを見て驚きました。ものもらいは、おろかだった身を恥じ、舌をかみ切つて死んだといううわさがたつたそうです。

(このはなしは那間・竹下茂徳氏から聞いた)

## 十四 赤子にクレーを授けた話

隣りあって住んでいた二人の男の妻は、二人とも子供の生まれる日を今日か明日かと待っていました。二人の男はその夜、ユイキ（寄木・流木）を枕にして干潮になるのを待っているうち、一人の男はすっかり眠ってしまい、一人はうつらうつらしていました。

すると、「ユイキ、ユイキ」と呼ぶ声がして、ユイキは「ホーイ」と返事しました。呼んだのは海の神で、「サトウ方に赤子が生まれたのでクレー（運のようなもの・位）を授けに行こうか」といいました。ユイキは、「私は人間の頭でおさえられ身動きができないので、あなたが授けてきてください」といいました。海の神は、浜に戻ると、

「男の子と女の子が生まれていた。男の子にはダイヌブシヌクレー（竹の節をけずる）、女の子にはチヂンブーヌクレー（粟や麦などをたく煙が家のチンチブトウから立ち上る）を授けてきた」といいました。

一人の男は海の神とユイキの話を知っていましたが、

もう一人の男はぐっすり眠り、その話を聞いていませんでした。

男の子と女の子は大きくなると親相談で結婚し、倉を建てる金持ちになりました。金持ちになってから男は辛抱して働いたときのことを忘れ、妻が麦をまぜてたいたご飯を食べさせたので、箸を投げつけて怒り、妻を追いつてしまいました。

金持ちになってから追い出された妻は、麦の種と粟の種をウチ（ツ）クイに包んで持ち、行く所もなく歩いていると小さい小屋にみすばらしい男がいました。

女は、その男に妻にしてくれるよう頼みましたが、みすばらしい男は聞いてくれませんでした。女は男に何度もお願いして妻にしてもらい、二人は働いて倉がいくつも建つ大金持ちになりました。

ある日のこと、みすばらしい男が金持ちの家に、バラ・ユイ・ユンジャマを売りに来ました。金持ちの家の妻はみすばらしい男は前の夫であることがわかりました。ユイ・バラを買ってやり、御馳走をして食べさせて帰したということでした。

(このはなしは、東区・高富森氏から聞いた。イヤ

ポー 祖父 から聞いた話だそうだ)

## 十五 アンジ・ニツチエーの話

島に伝わる話です。

—

むかし、ニツチエー(地名)というところに女がいました。屋敷のそばの畑で粟を構えておりました。にわか大雨が降ってきたので、畑のそばのほら穴の中に入って雨宿りをしました。つかれていたもので、ほら穴の壁にもたれて、うとうと寝てしまいました。

そのうち、ほら穴の奥の方から物音が聞えてくるので、振り向いてみたら、白髪の老人が、ぴかぴか光る杖をついて立っていました。

女は、びっくりしてあたりを見まわしました。

女は、夢を見ていたのです。

これは不思議な夢を見たと思いましたが、そのまま忘れて過ごしていました。ところが、だんだんと腹が大きくなって、大きな男の子を産みました。

その子供は生まれたばかりというのに、頭の毛はまっ黒く、目はばつちり開き、歯は生えそろい、出歯の怪児でした。家の人々は鬼の子ではないかと思うほどびっくりしました。それで人に見られないうちに、ほら穴の前の畑に穴を掘って埋めてしまいました。

ところが、その晩から、夜になると毎晩埋めたところからぴかぴか稲光がして、赤子の泣き声が聞こえてくるのです。

こんなことが七日間続きました。

家の人々はびっくりして、このままにしておくや罰が当たるに違いないと、八日目埋めたところに行ってみると、埋めた穴の上は地割れがしていました。ただごとでないことに驚いて掘り出すと、赤子はまるまる太っていました。家の人たちは、この子は神の授けた子に違いないといって大事に育てました。

二

七、八歳になると力も知恵も勇気もとびぬけていたので、近所の子供を集め、大将になって遊びました。また刃物をといたり、竹や木の棒で剣術や弓の練習をしまし

た。

この怪童には兄と妹がいました。兄のキヤーラドキは百姓が好きで農業をやり、妹のインジュルキは海が好きでした。インジュルキは、次兄の怪童に劣らぬ弓の名人で、たいへん強い弓を引きました。妹の弓は、島中でならぶものがないといわれる強い弓でした。怪童は妹の弓を借りて、近くの岩によじのぼり弓を引くけいこもしました。そのときふんばった足跡が岩の上に残っています。また、石積パンタの岩の上に旗を立てておき、島の東側を通る船が旗に射た矢をとり、その矢で船の帆に射返したので、東側を通っていた船は恐れをなして島の西側を通ることになったと伝えられています。

### 三

怪童が青年の年齢に達しないうちから、力も、相撲も、武術も、島中で彼にかなう者はいませんでした。彼は、琉球王に仕えようと思ひ、妹の弓を借りて持ち与論島を出ました。琉球王の居城は首里にありました。

首里に着いて数日すぎました。首里の王様は、はるばる与論島から、一人の強そうな若者が王様に仕えたいと

いつてお目どおりを願っていると聞き、さっそく面会しようとして仰せつけられました。

若者は、たいへん喜んで城に行きました。王様は、

「お前の名前は、なんというか」と聞かれました。けれどまだ正式な姓名も名もついていませんでしたので、

「名前はありません」と答えました。つぎに王様は、

「お前は、なにか特技があるか」と聞かれました。

「島の沖を通っている船の帆網を射落とすことができず」と答えました。王様はさらに試してみようと思ひ、彼を城の外に追いやっておいて、たくさん兵に城を幾重にもとり囲ませてから、

「さあ、なるべく短い時間で城に忍び込むように」と命じました。彼はお湯が沸くより短い時間で城に忍び込み、王様の前にきちんと座ってみせました。これを見た王様やおそばつかいの家来達は、びっくりして言葉も出ませんでした。

王様は大喜びで、おほめの言葉をたまわり、

「お前は、名前がまだないそうだが、生まれた土地は何というか」とお尋ねになりました。

「ニツチエーといいます」と答えると、王様は、「お前はニツチエーというところに生まれたから、これからニツチエーとよぶことにしよう」と言われました。王様は、すぐれた家来を持つことは何よりの喜びじゃと仰せられて、座をもうけて御馳走してくださいました。それに、

「与論から北の島はお前に治めさせるので、液司の位を与える」と仰せられました。それから後、「アンジ・ニツチエー」とよぶことになりました。

#### 四

ニツチエーは、王のおそば近くに仕えていましたが、王様にいとまごいをして、島に帰ることを願い出ました。王様はとどまるようすすめましたが、ニツチエーはおもいとどまりませんでした。王様は、

「それほどいうなら致し方ない。そのかわり形見を残しておくように」といわれました。ニツチエーは形見になるものを持ちあわせていなかったもので、しかたなく妹から借りてきている大切な弓を残すことにしました。

別れを惜しまれながら島に帰り、妹に弓を形見におい

てきたことを話しました。妹は大切にしていた弓であったので、朝夕たいへん心を痛めました。ニツチエーは何とかして妹を慰めたいと思い、島中を駆けまわり、丈夫な強い桑の木をさがして、それで弓をつくって与えました。それでも妹の気持ちを和らげられませんでした。

#### 五

ニツチエーは、どうにかして王様から弓をとりもどし、妹を喜ばせたいと思い再び琉球に渡りました。王様はニツチエーが形見においた弓がこのうえもなく気に入り、居間の床に飾り、この弓を見ることを楽しみにしておられました。ニツチエーは、これでは願い出てもお許しになるまいと思い、いろいろ策を練ったのですが、名案は浮かびませんでした。

しかたはない。忍び込んで持ち出すほかない。その機会をうかがい、忍びを決行しました。城の石垣に釘を打ち込んでよじ登り、屋根瓦をはぎ、天井から忍び込み弓をとり返しました。

妹インジュルキの喜びはひととおりでなく、生気いっぱいになり、兄と妹は仲よく海、山をかけまわっていま

した。

さて、琉球王の城内では、思いがけない盗難にあい、大騒ぎになりました。家来達は、八方に手をまわして弓のゆくえをさがしましたが、見当もつきません。

王はぶんぶんになって怒り、「これは普通の者のでることではない。与論島のアンジ・ニツチエーのしわざに違いない。兵一千、与論島にさし向けよ」と命令されました。

## 六

ニツチエーは、いつものように魚捕りに行っている、急ぎの使いが息を切らせて知らせてきました。

「琉球の軍船が、いま茶花の港に上陸しようとしている」というのです。さすがのニツチエーもびっくりしました。家に帰るとご飯の準備ができていました。ニツチエーは「腹がへっては戦はできない」、そういつて膳に向かったとき、三歳の子供が走りよって箸をとり、ニツチエーのご飯の上に突き立てました。ニツチエーはその意味を考える暇もなく、大急ぎでご飯をかき込むと、大刀を持ち、黒馬にまたがってピャーのパンタをかけ下り

茶花の浜に向かいました。

そのとき、敵は上陸してウシミチ（地名）というところまで攻めのぼっていました。ニツチエーは大刀をひき抜き、右に左に斬りまくったので、雑兵は恐れをなして退却し、船に逃げのびました。敵の死体は、ごろごろ重なり合っていました。ニツチエーは馬から下り、血刀を田の水で洗いました。（ニツチエーが刀を洗ったと伝えられる田の米は、いまでも祖先に供えてはいけないといわれています）

ニツチエーは茶花の岩の上に立って、船に逃げ帰った生き残りの雑兵に向かい、

「お前たちよく聞け。私のいうことを首里王に伝える。もし私の命に従わないと、罪に処するぞ」と叫びました。

そのときです。どこから飛んできたのか、一本の矢が飛んできて頭につき刺さりました。豪勇アンジ・ニツチエーは、無名の者の放った矢のため、直立不動のまま大往生を遂げたといえます。その矢は、軍船の老飯炊き男が、唱えごとをして天に向けて放ったものでした。



(ニツチエーが往生した地には後に祠ホコラを建てて祭りま  
した)

生き残った者はこれを見て喜び、早くおほめにあずか  
ろうと急いで帰り、王に報告しました。王は、

「なに、お前たちのような弱兵に殺されるニツチエー  
ではない」と信用なさいませんでした。

琉球王は、再び与論島に軍船一千をつかわしました。

琉球兵は、茶花の沖に船をとめ、はるか茶花の浜のあた  
りをうかがっていました。すると、ニツチエーは雄々し  
い武装をして生米(アレーグミ)をかみながら、近寄る  
軍船をにらみつけ、上陸するものは一刀のもとに斬り捨  
てる構えに見えました。(死んだ人の魂が昇天したら、  
水で洗って浸した生米を供える習慣がある)

琉球兵は、上陸する気概もなく、そのまま引き返せば  
王の怒りにふれるということで大混乱となり、逃げ帰っ  
た者の消息はわかりません。

## 七

琉球王は、ニツチエーの死んだことを知り安心されま  
した。だが、ニツチエーの一族を残しておくとのよう

なことがあるかもしれないと、翌年さらに精兵一千をさ  
し向けました。

琉球兵は茶花に上陸して一族のいるニツチエーの地に  
攻めのぼりました。

妹のインジュルキは、女ながら武具で身を固め、強い  
弓を引きしぼって、かいがいしく奮戦しました。インジュ  
ルキは、一息つこうと家の南側の宍穴にはいりました。

そのとき、通りかかる一隊がありました。インジュルキ  
は、この一隊と必死になつて戦いましたが、多勢に無勢  
では防ぎきれず、ついに斬られてしまいました。不思議  
なことに、インジュルキの首が切り落とされるとその首  
が、

「ニリヤパイシリ ハネーラバイシリ」

(海の神さまが、早い流れに)  
とうたつて宙を飛びまわったといえます。のろいの歌で  
した。

琉球兵は、このありさまを見て恐れおののき、われさ  
きに船に乗りひきあげていきましたが、途中の海上でに  
わかにかき曇り、大暴風になり船は一隻も残らず沈

没してしまいました。琉球に帰りついた者は一人もいなかったといえます。

(このはなしは西区・源島保氏から聞いた)

## 十六 サービ・マートウイの話

むかしの話です。

むかし、サービ(地名)というところにマートウイという名の剛力がいました。土地の人はサービマートウイとよんでいました。

マートウイは、幼い頃から人に秀でた知恵と、身体とウデプシ(腕力)の持ち主でした。武術にもたけていましたが、特に弓が得意でした。沖を走っている船に矢を放って帆を射落としたので、沖を行く船は「マートウイユン(弓)」と行って恐れたといえます。

一

マートウイは琉球の奥(地名)というところにニングルを持ち、日が暮れると友達のウブドーナタと一緒に、それぞれ舟を漕いで渡りました。また明け方になるとめいめい舟を漕いで八キビナの浜に帰りました。

ある夜のことです。まだ一番鶏が鳴いていない頃でしたが、八キビナの浜に舟をあげて(所定の場所に舟をかつきあげる)いました。

ところが、ピジョウパンタ(地名)の方から、がやがやにぎやかな話し声が聞こえて、海岸に近づいてくるようでした。今の時刻に何事だろうと、耳をそばだてて聞いてみると、その一人が、

「今晚、サービマートウイの命をとらねばならない」といいました。不思議なことに、声は大きくなって近づいてくるのに、足音もないし、いくら待っても人影はあらわれませんでした。

マートウイは、これは悪霊のしわざに違いないと思い舟を逆さまに伏せてその中に入り、夜の明けのを待ちました。友達のウブドーナタは、マートウイの引き止めるのも聞かずに帰ったので、家に帰り着いてから急死したともいわれます。ウブドーナタはマートウイの身がわりにされたのかもしれない。

二

マートウイは、資産家(イエーキ)でたいへん農業に

も励みました。ある日、ピジヨウの田の藺草を刈り、牛に四まるき（束）背負わせ坂道を登りました。牛は、ひんひんいいながら口いっぱいあわを吹き出し難儀そうだったので、マートウイは見かねて荷物もろとも牛の前足を肩にかけて坂道をかつきあげたといひます。

### 三

またあるとき、サーシ（地名）の二反もある大きな田で、八人組を相手に稲刈りの競争をしました。この競争に勝った方が八人分のご飯を食べる約束でした。マートウイは八人組より早く刈り終わり昼飯を食べはじめました。八人組が、昼飯を分けてもらおうとするとマートウイは釜をかかえて逃げ、追われてサーシの大石を三度まわる間に八人分の飯を食べ終わったということです。

### 四

ある日、田を耕すのに、島中でいちばん力のあるウグトウイ（雄牛）を借りようと思って、島をまわって歩きました。けれども人々は力持ちのマートウイに牛を貸せば使い殺す（チケークルシユン）といって貸そうとしませんでしたが、ある家で牛を貸してくれることになり、

おかげでマートウイは田をすき、大きなイシビキ（石引き）をくくりつけて地ならしもすませてしましました。マートウイは牛を借りたお礼に米俵一俵と、馬一頭で背負いきれないほどのトオートオーギン（トウモロコシ）を背負って行きました。

これを見て、力のある大きなウグトウイを飼っていた家では、自分の牛を貸せばよかったとうらやましがったということです。

### 五

ある夜、マートウイは夜ふけになって家に帰りました。その時、向こうの方から男が三人話しながらやってきました。マートウイは、  
「こんな夜ふけに、あなたがた三人は誰で、用は何ですか」と聞きました。一人の男がいうに、

「わたしたちは牛のはやり病の神だ」といいました（そのころ、牛の流行病で島の人はいへん困っているところでした）。マートウイは、三人の牛のはやり病の神に、

「わたしは貧乏神にとりつかれて困っています。わた

しの家の牛には、やはり病をかからせないようにしてくださいませんか」と、たのみました。やはり病の神は、

「それでは、お前の牛の角に里芋ガラをくくり目印をつけておけ」といいました。

あくる朝、マートウイは島中の人に、牛の角に里芋ガラをくくりつけるように伝えてまわりました。おかげで牛の流行病は治まったということです。

## 六

サービマートウイは、パル（原・畑）仕事をしながらよく魚捕りに行きました。

ある夜、いつものようにくり舟を漕いで沖に出ました。その夜は魚がつきませんでした。それで今夜はもう帰ることにしようと思つているところでした。そうしたら波間から何者かの声が聞こえてきました。

「あなたは、どうして力持ちになつたのか、教えてくれ」というのでした。マートウイは、怪しいやつ、こらしめてやれと思ひ、

「私が力持ちになつたのは、サーシ（地名）の大石で手のひらを打つたからだ」

と教えました。怪しいやつは、

「あなたのように力持ちにしてくれ」と頼みました。

マートウイは承知して、サーシに連れて行き、サーシの大石を持ち上げ、怪しいやつの手をひらを、ずしんと打ち砕きました。怪しいやつは色をかえ、

「痛い」

と叫んだかと思うとピカツと光りました。そして流れ星のように尾を引き、ヤンバル（山原）の辺土岬に逃げたということです。

（このはなしは西区・源島保氏から聞いた）

## 十七 ウブドーナタの話

むかし、ウブドーというところにナタという人がいました。島の人はウブドーナタといって敬っていました。ウブドーナタは、体は小さいが蒙力で十人力の力持ちだといわれていました。

また知恵といい、武術といい、ともにすぐれていましたので、その名前は島中はもちろんのこと、遠く琉球国まで知れわたっていました。

ある年のこと、琉球国に、どこかの国の軍船が攻め寄せたことがありました。琉球の王様は、敵の軍勢があまりにも強そうでしたので、打つ手がありませんでした。王様は、重臣達を集めていろいろ策をめぐらしたのですが、これというよいはかりごとが浮かびませんでした。ひとりの重臣が、王様の前に進み出て申し上げました。

「聞くところによると、与論島に十人力の力持ちで、知恵もあり、弓の名人として知られたウプドーナタという人がいるそうです。この人の助けをかりると、必ず敵を追いはらうことができると思いますが、どうぞごさいましようか」

王様は、「すぐ助けを頼め」といわれました。さっそく三隻の小舟に使者を九人分乗させて与論島に向かわせました。ウプドーナタは、王様の願いを引き受けました。そして使いの者に、

「私は、一日おくれて参るから、お前たちは琉球にもどって王様に引き受けたと申しておけ」といって帰しました。

ウプドーナタは翌日ひとりで舟を漕ぎ琉球に向かいま

した。琉球に着くと、一日早く与論島を出発した使者はまだ帰り着いておらず、一日おかれて着きました。王様はウプドーナタをおそば近く呼んで、知恵と力をくれるよう頼みました。ウプドーナタは王様に、

「みな殺しにしましょうか。それともおどして追いはらうことにしましょうか」と尋ねました。王様は、「まず、おどすことをさきにやってほしい」といわれました。

ウプドーナタは、大弓に矢をつがえ、敵の大将の乗っている軍船めがけて射放ちました。ちょうどそのとき、敵の大将は昼食の膳に向かつて箸をとろうとしているところでした。放った大弓は、ねらいたがわず大将の高膳の真ん中に突きささりました。

放たれた矢は、大将が今まで見たことのない大きな矢でした。敵の大将は顔色をかえて驚きました。

敵の大将は、勝ちめはないと思い、あわてて碇イカリを切って逃げました。王様はたいへん喜び、ほうびに姫をウプドーナタにくれたということです。

(この話は西区・源島保氏から聞いた)

## 十八 パマタイマジユマとフクルビのムヌ

むかし、パマタイ（地名）というところにマジユマという人がいました。マジユマは、体格・器量・知恵とも人にぬきんでていました。

フクルビ（地名）の大岩を抱いて四方に枝を張っているウスク（アコウ）の大木にムヌ（妖怪）が住んでいました。人々はこの妖怪をフクルビのムヌとよんでいました。

マジユマと妖怪は、力石を持ち上げたり、相撲・自慢話・魚釣り・知恵くらべなどしましたが、いずれも五分五分の勝負でした。

ただ一つ、マジユマが負けるのがありました。マジユマとムヌはイザリに行き、とれた魚貝の量は五分と五分ですが、家に帰るとマジユマのテイルの魚は片方の目玉がみな抜き取られているのです。マジユマは知恵のあるだけしぼって考え、気をつけるのですが、これだけはマジユマの負けでした。

ムヌがマジユマに負けるのが一つありました。マジユ

マに手首を力いっぱい握られると、顔を青くしたり赤くしたりして、すっかり体から力が抜けてしまいました。それでムヌは、降参して放してもらいました。

ムヌは、ときおり村人をからかい、悪さをして楽しむのでした。村人の豚小屋をまわって豚の片目を吸いとり片目にしてしまうのです。村中は、たいへんな騒動になりましたが、何者の仕業か知る者はいませんでした。村人はどうすることもできず、たいへん困っていました。

マジユマはムヌがこんな悪ふざけをして村人を困らせるのを見て、ムヌをこの島から追い払うしかないと思いました。

マジユマには賢い妹がいました。マジユマは妹に、「今夜フクルビのムヌをさそっていざりに行き、いざりをしている所からタイムツ（いざり火）をかかげるから、それを合図にフクルビのムヌの住んでいるウスク（アコウ）をウンガラマチ（甘藷の乾燥した蔓・火のたきつけにする）で火をたきつけて焼きなさい」といつけて、家を出ました。

ムヌは、それとは知らずに、マジユマとイダイを競っ

ていました。そのとき、パチパチ、トントン生木の燃える音がして、みるみるうちに火柱が立ち島の西側の空をこがしました。ム又は、

「私の家の方向である。ちょっと見てくる」といってマジユマのそばから消えました。しばらくして帰ってきてム又は、

「私の家は、ウンガラマチをたきつけにして焼かれました。もう住む場所はない。ヤジヌ岬（地名であるが不明）に逃げよう。ナーヤー（さようなら）」といって、火玉になり尾を引いて逃げに行ったそうです。

（このはなしは西区・栄喜次郎氏から聞いた）

(注) ウンガラマチはプーキガマラシャ（伝染病や災厄を起こす悪神が横行する）のとき、燃やすと魔除けになるといわれた。マジユマはパマタイの地に祭られている。